



性別轉換

～女の子になってまで欲しかったボクの幸せ～

もちもち堂

学校でも家にも居場所がなかった。

何をしてもドンケツで才能もない。

誰からも見てもらえない、まるで

空気のような存在

それがボクだ。

このまま大人になっても誰にも愛されず
一人寂しく生きていくと思っていた。

突如ボクの前に現れた悪魔を名乗る
男に会うまでは。

彼はある契約と引き換えに愛されたいという
ボクの願いを叶えてくれると言った。

そう、女に変わって精液を集めるといふ契約の
代わりに誰からも愛されるようになるという
体を与えたのだ。



(ほわあ!すごい!
本当に女の子になっちゃってる!)

鏡の前でぐるりと回り全身を見てみるが
何処をどう見ても元男となど分からない
ほどの美少女に変わっていた。



(これなら契約っていうのも何とかかなりそうかな?あの悪魔もただセックスするだけで良いっていつてたし)

(……いや、まあ、男とセックスするのに抵抗はあるけどね)



「おい、何ドタバタしてるんだ！
少し静かにし…」

「…あと、父さん」

少し騒ぎすぎてしまったのか父さんが
大声をあげながらボクの部屋に入ってきた。



「……晴、か？」

「そ、そうだよ、何？」

「自分の子供の顔も忘れちゃったの？」

「あ、いや、そんな事はないが……」



(うわあ、やばい、すごいドキドキする。
父さんと話したのいつぶりだろう?)

(:いや、それよりボクが女の子に
なったのを何も不思議がってない)

(これもあの悪魔の力なのかな)



「と、取り合えず休みだからといって
あまり騒ぐんじゃないぞ」

「うん。その、ごめんなさい」

叱られると思いき落ちしてしまった
ボクを父さんは今まで見たことのない
ように慌ててフオローしてきた。



「いや、そこまで怒ってるわけじゃないんだ。
ごめんな少し言い過ぎたよ」

(…?父さんがボクに謝った?)

(あの厳格で怖い父さんが?)

「ああ、そんな悲しそうな顔しないでくれ」



そう言うと父さんはボクの腕を取り
優しく抱きしめた。

「へ？あの、父さん？いきなり何を…」

「……」

「ね、ねえ…聞ってる？」



「ひうっ♡だめ、とう、さんっ♡
そんなとこ、触っちゃ…っ♡」

「そんなこと言って本当は
期待していたんだろ？」

「ほら、ちよつと触っただけで
こんなに濡れてきたぞ」

はわさわわっ

びんびん

んん

んん



「はあ…♥あ…っ♥だって…っ♥」

いやらしく下着を弄る感触に体が勝手に
反応し声が漏れ、内側から溢れるような
快感に愛液で下着を濡らしてしまう。





う、あ…っ♡何で急にこんなこと(…)

(もしかして男の精液集めろって言ってたけど、あの悪魔ボクに何か仕掛けでもしてたのか?)

びん

はあ♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡



(…んっ♡ボクこのまま男と…
それも父さんとエッチしちゃうの?)

(…でも、いつもボクを見てもくれない
父さんが今こんなに夢中になって
くれるなんて…ちよつと嬉しいかも♡)

んっ

んっ

んっ

んっ

「んっ♡はあ♡あ…うくっ♡あ、ああっ♡」

「父親に触れられてこんなにトロトロにオマンコ濡らしていけない子だな」

「ひうっ♡だってこんなにオマンコ弄られたら勝手にエッチな気分になつて来ちゃつたんだもん」

ビュッ

あ♡あ♡

ハハハ♡

AKA AKA♡



「ふう…っ♥くうっ♥父さんのが、
ボクのなか、に…っ♥」

内側を押し広げるように熱く硬い肉棒が
ずぶずぶと自分の中に侵入してくる。

(なに、これ…っ♥ボク初めてなのに
痛いどころか滅茶苦茶気持ちいいっ♥)

あぁあぁ
あぁあぁ

ビュッ



「う…っ！す…ぐ…く…いい締めりだぞ！
こんなに父さんを求めてくれるなんて…！」

「ああ！私はなぜ今までこんな愛しい娘を
ほったらかしにしていたんだ！」

「ひうっ♥あ、ああっ♥
とう、さん…っ♥とうさん…っ♥」



ズンズン

ズンズン



(父さんがボクを愛してくれている♡)

耳元で囁かれるその言葉に背筋をゾクゾクとしたものが駆け上がり、獣のようにボクを求めてくれる父さんに嬉しすぎて体が勝手に腰を浮かしてしまう。

ズッ

ズッ
ズッ



「はあ……はあ……晴、好きだぞ！
これからはもっと、もっと愛して
あげるからな！」

「うん♥ボクも♥ボクも父さんの
おちんぽすきい」

ゼッ

ズッ
ズッ



「ひぐうつ♡奥そんなに
ずんずん突いちや…っ♡」

「あ、ああっ♡おちんぽ子宮口まで
届いて頭ジンジンしちゃうよ♡」

あ
あ
あ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

「うおっ！引き抜くとき
す〜い絡み付いてくるぞ……！」

「そんなに父さんのちんぽを
放したくないのか？」

「だって…だって、好きなんだもん♡
父さん、もっと…もっとボクを見て♡
ボクを感じて…っ♡」

ビュッ

ビュッ
ビュッ



「ああ…晴っ！出すぞ！晴のお腹の奥に
父さんの精液いっぱい出してあげるからな！」

「うん、きてえ♥父さんの精液でボクの
子宮の中いっぱい満たしてえ♥」

ズル
ズル

んんん
ハハハ

ズル





どぴゅっ!びゆるるるっ!!

「あっ♥はあああ〜っ♥あっついのでてるう♥
父さんの赤ちゃんの素、沢山だされてるうっ♥」

あああ

びゅっ

どゅっ

「はあ…っ♡はあ♡んっ♡これ、すぐっ♡
気持ちよくて腰、勝手にうごく…っ♡」

「おほおっ♡お、ああっ♡なん、なんで
こんなあ♡」

はあ…っ♡

んん

びん

びん

初めて父さんとしたあの日からボクは
快楽を求め、今のように何度も父さんと
セックスをする関係になっていた。





んん

んん

んん

んん

「ひぐうっ♥んっ♥あくうっ♥
お腹のおくう♥キュンキュンして
気持ちいいの止まらないよっ♥」
「う、あっ♥ん、んっ♥んっ♥あ、ああっ♥
だめ、ボクもう…っ♥我慢できないっ♥」



実の父と恋人のように手をつなぎ淫らに腰を振る。部屋中に水音と。パンパンと肌がぶつかる乾いた音が響く。それがより一層の興奮よび、ボクらはお互いを獣のように求めあった。

「…っ！私もだ、晴っ！出すぞ！
このまま一番奥に…っ！」

「うん、きてえ♥父さんのあっつい精液
ボクの中にちょうだいっ♥」

ハ〜っ♥
ハ〜っ♥

はあ♥

ゼッ

アッ
アッ





あぁあぁあぁ

はぁーっ♡

「お、おほおっ♡ 射精きたあ♡ ひぐうっ♡
お腹の奥にあっついこのビチャビチャ
出されて気持ちよくなっちゃってるう♡」

びゅぶ、びゅぶるるるるっ!!

びゅ

びゅ

びゅ

びゅ

びゅ

避妊など一切してないのを構わずに父さんは
グリグリと腰を突き上げ射精する。

子宮の奥に精液をぶつけられる度、
頭の奥がチカチカと白く染まってしまふ。



「…もう♡あんなに出したのにおっぱい吸ってるだけでこんなにしちゃうなんて父さんは甘えん坊だな♡」

「こんなにおちんぽガチガチにしてそんなにボクの手でシコシコさせながら射精したいの？」

ちゅわん
ちゅわん

ちゅわん
ちゅわん

ちゅわん
ちゅわん



(ふふ♪この前までボクを見てすらいなかった
父さんがセックスしただけでこんな情けない
顔をしながら今はボクに夢中になってる)



(…凄いな悪魔の力は)

(これさえ…この女の体さえあれば
もうボクは誰にも愛されない可哀想な
子なんかじゃないんだ)

ちよん
ちよん

ちよん
ちよん





「う…っ！はるっ♥父さん、もう…っ♥」

「んふふ♥いいよ♥このままおっぱい
吸いながら、ボクの手の中に出しちゃえ♥」

ちやう
ちやう

ちやう
ちやう

ちやう
ちやう



ぶびゆるるるるっ!!

「…っ!んっ、んっ!」

「あはっ♥父さんの白いアロアロおっぴんじゅ
いっぱいボクの手の中に吐てるよ♥」



あん♥

びゅん



びゅん

(まさか父さんとああいう
関係になるなんてな…)

悪魔と契約し父さんとセックスしたあの日
から父さんは嘘のようにボクに優しくなった。

それだけでなくいつもボクを無視していた
兄さんも普通に接してくれるようになった
くれた。



(こんなに日常が楽しいなんて
今までなかったな)

(そうだよ！ボクは皆から求められる
こういう生活がしたかったんだ！)



「ふふ♪まさに順風満帆ってやつだね」

「……」

鼻歌を口ずさむほど上機嫌なボクは自分を見つめる兄の熱の籠った視線に全く気付いていなかった。





「はあ…はあ…んぐつ…く…つ…」

「ん」

んんん

んん

んんん

んん

夜、おそろしく深夜なのだろう。

荒い呼吸と胸に挟まれた熱く硬い感覚に
目が覚め、眼前でボクの上に跨り腰を振る
兄さんと目が合った。



「…なに、してるの兄さん」

「う、あつ…晴っ」

丁度我慢の限界だったのか兄さんは胸の中へと射精する。ボクはそれを努めて気にしないようにまた聞き返した



「それで、本当に何してるの兄さん」

「うっ、ごめん。こんなレイプまがいの事して、
…でも父さんと晴がしてたところ見たら
俺もお前としくなってる……」

うんっ

うんっ

うんっ



(…あ、あはは♪すごいっ！あの兄さんまで
ボクをこんなエッチな目で求めてくれる
なんて！)



(ボクなんかじゃ何一つ敵わない天才で家族や学校での期待を一身に受けている兄さん)

(その兄さんが今、童貞みたいにならなくて必死にちんぽ擦りつけてるんだ♡)

(どうしよう♡滑稽すぎて可愛くすら思えてきちゃった♡)

んんん

んんん

んんん

「もう、しようがないなあ♡」

「…いいよ、兄さん♡エッチしたくてパンパンに膨らましたちんぽ、ボクのおマンコで受け入れてあげる。」

んんん

んんん

んんん



「んっ♡いま入れてあげるからね♡」

ボクはそう言っていると服を脱ぎながら兄さんの上に跨り、熱く滾ったそれを秘所へとあて、ゆっくりと腰を落としていく。



「くっ…くっ…くっ…」

硬くそそり立ったイチモツは奥へと届くと同時に漏らすようにビチャビチャと射精し、温かい精液がじんわりと膣内に広がる。



「あはっ♥兄さんの精液、お漏らし
したみたいにいっぱい出てるよ♥」

「う…あ、ごめん気持ちよすぎて…」

はめ♥

はめ♥



「んふふ♪いいよ、初めてだもんね？
しょうがないよ」

「このまま抜かないで動いてあげるから
イキたくなったらまたイっていいからね♥」



溢れ出る精液を潤滑油に扇情的に腰を振る。

快樂に必死に耐えている兄さんの顔が可愛くて、加虐心が煽られより二層激しく責めてしまう。





「晴っ！俺また…っ！」

「我慢しないで好きな時にボクの中で
イちゃっていいからね」

「うっ！あ、あああっ！」

あ
あ

あ
ッ

♡♡
フーッ

どろっ

あ
あ



びゅぶるるるるっ!

「きた、きたあ♥兄さんの精液、子宮に
びゅっ、びゅっででてるう♥」

「あっ♥ああっ♥ん、んくっ♥
温かいのが広がって：気持ちいいっ♥」

あ
あ
あ

アッ

ドキ
ドキ

どろっ

あ
あ
あ





はあ♡

はあ♡

(すごいな、童貞の兄さんでこれだけ気持ちいいなら、他のもつと慣れてそうな人相手だったらどれだけ気持ちいいんだろう?)
それを想像しただけで興奮で体がブルリと震えてしまった。

どろろ

びしょ

「晴ちゃん緊張してる？」

「あ、いえ…だ、大丈夫です」

(…って言っても流石に初対面の相手に裸を見せるのはちょっと恥ずかしいな)



ボクは今から会ったばかりのこのおじさんとセックスをする。

あれから好奇心を抑えきれなかったボクは出会い系アプリを使ってセックスの得意な人を探したのだ

まさか自分がこんな行動力があるなんて思ってもみなかった。



「何だかあまり慣れてなさそうだけど
晴ちゃんって初めてかい？」

「いえ、そのセックスはしたこと
あるんですけど…その、知らない人
とは初めてで…」



「んっ……んちゅ、んむっ……ちゆる……んっ♡」

ボクが言い終わる前におじさんはボクを抱き寄せると、少し強引に舌で唇を割り口内へと侵入させてきた。

舌を絡ませながら唾液を流し込まれ口いっぱいにおじさんの臭いが充満しそれだけで頭が段々と朦朧とってしまう。



「ふはあ♡いきなりすぎですよ」

「ごめん、ごめん。少し強引だったかな。
でもこれで緊張も解けただろ？」

「それは、そうですねけど…んっ♡」



おじさんはそう笑いながらボクのお尻を
ムニムニと揉みしだく。その慣れたいやらしい
手つきにボクの期待は高まり秘所からは愛液
が溢れ出てしまう。



「おじ、さん、ボク、もう…っ♡」

「おいおい、自分だけイクのはダメだぞ、
「こっちも気持ちよくしてくれなくちゃな」

「…え？」

ちゅっ
ちゅっ



「う、これでいいの？」

言われた通りにおじさんのちんぽを胸で挟む。

胸の中で熱くそそり立つそれがビクビクと
脈打つ度、興奮と羞恥で心臓がドキドキと
早鐘を鳴らしてしまう。



「ああ、いいぞ。そのまま涎を潤滑材にして
胸で扱きながらチンコを舐めるんだ」
「う、うん…わかった、やってみる」



はあ♡

ハハハ♡

ハハハ♡

ムムム♡

「はあ…はあ♡ん、んんっ♡ちゅぷっ…ちゅ♡」
(すぐ…っ♡この味と臭い…♡)
(雄臭くておいしい♡頭がぼーっとして
勝手に口が動いちやうよ♡)



はあ♡

ハ〜♡
ハ〜♡

（ちよつとだけサービスのつもりでして上げるだけのつもりだったのに…♡）
（舐めてるだけで頭の奥まで痺れる
ような雄の臭いに犯されてるみたいで
舌、止まらない…♡）

♡♡♡

ちよつと♡
ちよつと♡

♡♡♡

「あむ、ちゆる…んっ♡じゆる…っ♡」

「さっきまで恥ずかしがっていたのに
今はおじさんのチンコにこんな夢中
になるなんて晴ちゃんはエツチな子だな」

「んちゅ♡…だっっておちんぽ美味しくて
口が止まらないんだもん」

ハ〜♡
ハ〜♡

ちゅ♡
ちゅ♡

♡
♡
♡

♡
♡
♡

はあ♡
♡



「そんなに喜んでくれるのはいいけど
こっちで味わえばもっと気持ちいいと
思うぞ」

「ひゅっ♡」





足の指先で愛液でトロトロに溢れかえった
秘所を軽く弄られ、それだけでボクはイって
しまった。

「ほら、こっちは愛液でドロドロで準備万端だ」

「んっ♡ひあっ♡あ、ああっ♡おじさんのおちんぽゴリゴリなか抉って…っ♡」

「お、おおっ♡ボクのなか、広げられて…っ♡形変わっちゃう…っ♡」

「うぐっ…っちもチンコ気持ちよすぎて腰止まらないぞ！」

どわっ

はあ♡

ハハハ♡

ハハハ♡

ハハハ♡

ハハハ♡





「ひあつ♡あ、あうっ♡そんなズプズプ
されたらお腹…♡めくれちゃうよお♡」

「ん、ああつ！ひつ、あうっ♡

「やば、これ…♡お、おくがあ、
ごりごりってええええ♡」

「だめ、これ、だめ…♡イツちゃう♡」

ん
ハハハ

ハハハ！
ハハハ！

アハハ
アハハ

「っ！っ！っ！っ！もう出そうだよ。
外に出すかい？それとも、このまま…」

「あっ♡あああっ♡外に出しちゃ…だ、めっ♡
このまま…っ♡なか、が良いの♡」

「そうか、それじゃたっぷり
出してあげないとな！」

どわっ

っ！

んん

んん

んん

んん



子宮の奥に精液を叩き付けられると同時に
絶頂した体が快感で跳ねあがる。

絶え間なく来る快樂の波に、もはや何の
抵抗も出来ずにビクビクとイキっぱなし
になってしまう。

はあ〜♡

ビクッ

ア〜♡

はあ♡

ビクッ

ビクッ♡
ビクッ♡

ゼッ♡



「う…っ、ふう。すごいな、あれだけ出したのに
晴ちゃんの中に入れてるだけでまた硬く
なってきたよ」

「どうだい？おじさんはまだまだ
出来るけど晴ちゃんは どうして欲しい？」

はあ♡

どわっ

アッ

はあ♡

どわっ

どわっ
どわっ

せろ♡



「はあっ…はあ♥んっ、もっと…欲しい♥
もっと激しく、してえ♥」

ボクが腰を突き出しさらに求めると
おじさんは覆いかぶさりまるで動物の
交尾のような格好で腰を押し付けてきた。

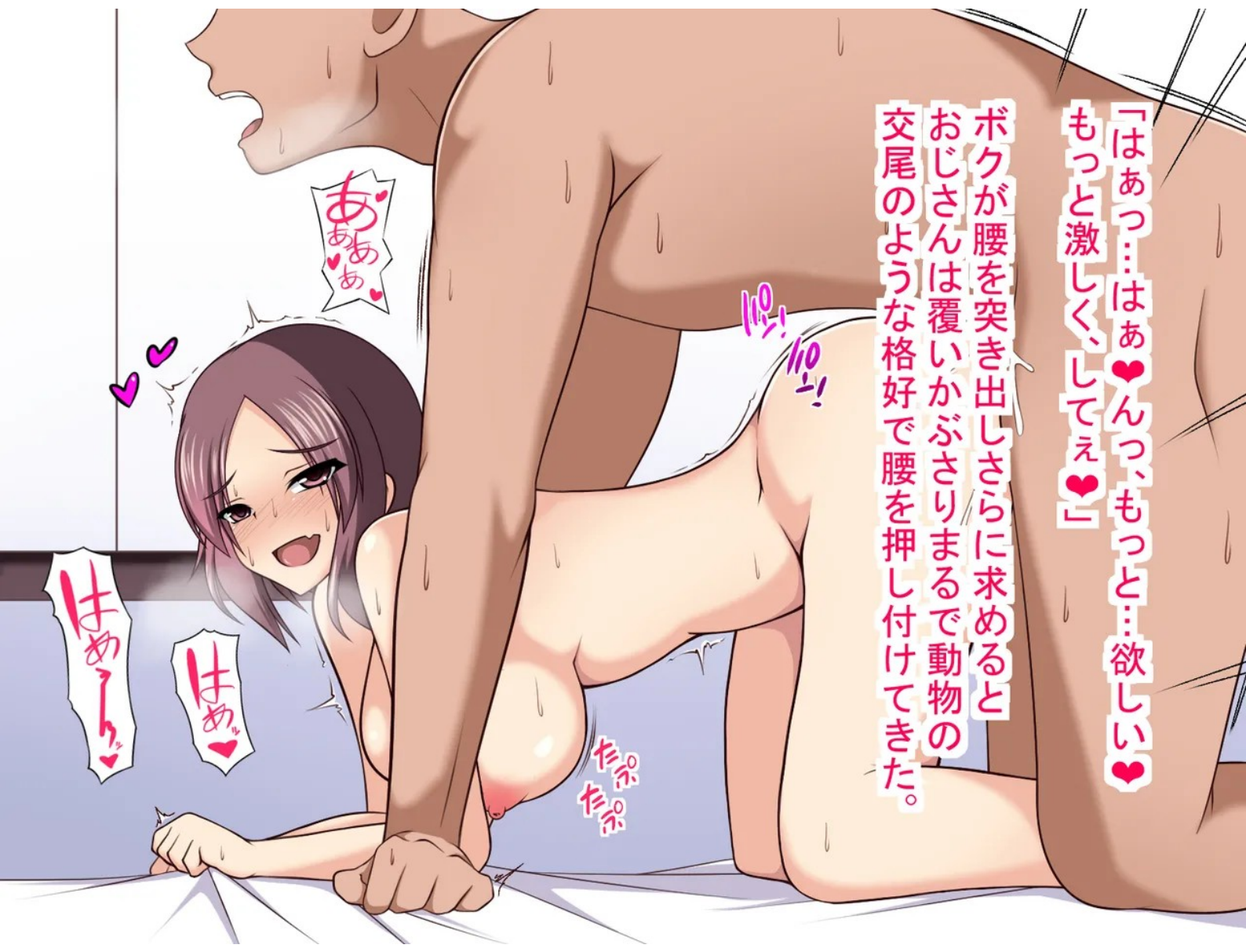
んっ！
んっ！

んっ
んっ

あ
あ
あ

はあ
はあ

はあ
はあ



「おほおっ♥あ、あぐうっ♥」

「うおっ！中がさつきより締め付けてくるぞ。
チンコで二突きされただけでイクなんて
ほんとドスケベだな」

「…っあい、イってない……♥
イってなんてないよ♥」

「だから、もつと……♥もつと、ちようだい♥」

ちんぽ
ちんぽ

あ
あ
あ

は
あ

は
あ



媚びるような声でおじさんを求めもっと
欲しいと言わんばかりに自分から腰を
押し付ける。

そんなボクにおじさんはいやらしそうな
顔を向けより強く腰をぶつけてくる。

あ
あ
あ

い
い
い

ち
ち
ち

は
あ

は
あ



「ふ、くうっ♥あ、ああ…♥そこ、いま
敏感になってる、から…っ♥」

「あああ、あっ♥あうっ♥だめ、これ以上
され、たら、ボクもう…っ♥」

「出すぞ!このまま中で受け止めるっ!」

いっ!
いっ!

たっ
たっ

あ
あ
あ

は
あ

は
あ





「晴ちゃん最高だったよ。おじさん
年甲斐もなくハッスルしちゃったよ」

「えへへ♥おじさんも

エッチ上手くて凄かったですよ」

「良ければまた会って下さいね♥」

ボクはそう言うとおじさんと
連絡先を好感して別れた。



(すごいな、初めて会ったおじさんでこれなんだ。世の中にはもっと凄い人がいるのかな?)

(∵はは、なんだかワクワクして来たかも♪)



「頼む！もう止めてくれ！」

「あはは♡だらめ、だって誘ってきたのは
そっちだよ。だからボクが満足するまで
頑張ってるね♡」

んん

110!!

110!!

アッ
アッ



「くぅっ…ぐ…ぐ…」

「はぁ♡んっ♡はぁ♡ぶっといので
ミチミチ広げられながら出されて…っ♡
あぁっ♡これ結構いいかも♡」

んっ♡
んっ♡
んっ♡

はぁ♡♡♡



「う、ぐ…っ…これ、以上は、まず…っ！」

「ほら、ほら♥もっと突いて♥ボクの中
気持ちよくて、いっぱい出したいでしょ？」

「…くっ…うぐっ…もう…っ…む、り」

んん

あッ
あッ

110ッ!
110ッ!

はあ♥
♥
♥





びゅぶるるるるっっっ!

「あはっ♥すごっ…っ♥射精されながら
突き上げられるの気持ちいいっ♥」

ビュッ
ビュッ

ビュッ
ビュッ

はぁっ♥

はぁっ♥

110ッ!
110ッ!

アッ
アッ



何度めかも分からない射精が膣内を満たす。だがそれだけでは満足できずボクはさらに腰を振る。

下の男を無視するかのような激しい動きで腰を振り精液を絞り続ける。

数時間後…

「はあ♡はあ♡んっ♡
久しぶりに満足したかも♡」

「…って、やばっ！この人、意識がない！」

はあ♡

んっ♡

んっ♡

はあ♡

はあ♡



「ふう……。良かった気絶している
だけか、流石に焦ったよ」

「…やっぱり少しやりすぎたかな？」





ボクはおじさんとしたあの日から誰彼構わずセックスをするようになっていった。
もちろん最初は抑えようとしていた。
でも性欲が強くなって止めようにも止まらないのだ。

(んゝやっぱり最初に合ったおじさんに
会いに行こうかな?あの人絶倫ぽかったし)



「ぶっ！くうっ！上手くなったな晴ちゃん」

「へへ♪でしょ♥色んな人と
エッチして勉強したんだ♥」

「なるほど、ぶっぐりっで…っ！」





「んちゅ♡じゅる…っ♡ちゅ…じゅぷぷ♡」
「っお！やば、一回出さず晴ちゃん…！」

「なあ、晴ちゃん。そんなにし足りないなら
おじさんの恋人にならないかい？」

「もしなってくれたらもつと気持ちいいことも
して上げるよ」



「んっっ、確かに満足できないことも多いけど……ごめんね？」

「ボク、沢山の人とエッチしたいからおじさんのモノだけになって上げられないかな」



「それにおじさんのおちんぽ、おつきくて
気持ちいいけど、ボクは小っちゃいのも
太いのも色んなおちんぽが欲しいんだ」

「あはは！晴ちゃんは好きモノすぎて、まるで
淫魔みたいだな。なら、おじさんとしたく
なったらいつでも呼んでくれていいからね？」

「うん♥ありがとう、おじさん♥」



(気持ち嬉しいけどおじさん二人の恋人になつたら本当に絞殺しちやいそうだしね)

(やっぱりお気に入りの人には長生きしてもらいたいしね♪)



(…ふふ♪それにしてもセックスしただけで
皆がボクに夢中になって愛してくれてるんだな)

(こんな簡単なことで人から求められるなんて、
ボク女の子になれて本当に幸せだ♡)



















































































































